

学力論争の根源的課題

- 特集テーマに関連して -

平 沢 茂

(文教大学教育学部)

On the Issue of Academic Achievement in Japan ; in Connection with the Feature

HIRASAWA SHIGERU

(Faculty of Education, Bunkyo University)

要 旨

日本における学力低下論争の最大の問題は、今、子供たちに共通に修得させなければならない学力（共通基礎学力）とは何かについての展望を欠いていることである。この根源的な問いを明らかにしないままに、学力が低下すると騒ぎまわるのは、一種の「狼少年」現象と言ってよい。今求められる学力の本質は何か、共通基礎学力とは何かについて考察する。

1. 学力を問う寓話

仏教説話にこんな話がある。

ある村に、あやかしの噂が広まった。夜な夜な村の広場に、白象に乗った仏様が姿を現すというのである。村の善男善女はみな、仏様を一目見ようと夜の広場に集まるようになった。噂は近隣の村にも広がり、遠方からも人が来るようになった。

ある晩、大勢の善男善女にまじって一人の高僧が広場にたたずんでいた。高僧も、仏様の姿を求めて遠方から来たのである。

やがて、日が暮れ、深更に及んだ。まさに漆黒の闇の中、村の広場に集まった人々はみな息を殺して仏様の出現を待った。

すると、広場の中央にほのかな光が生まれた。やがてその光は、明るさを増し、そこには紛れもなく、白象に乗った仏様の姿があった。人々はみな「有り難いことだ」と仏様に

向かって手を合わせた。高僧もまた、感極まって数珠を手に読経をした。

人々の興奮が最高潮に達したかと思われたそのとき、突然、一人の男が群衆の前に躍り出て叫んだ。

「嘘っぱちだ。ここにいるのは仏様ではない！ だまされてはいけない」

群衆は、驚いて、その男を見た。貧しい身なりのその男は、「嘘だ、嘘だ」と繰り返して叫んだ。

高僧も驚きつつ、その男をたしなめた。

「お前は、有り難い仏様に向かってなんということをするのだ」

すると、男はこう叫んだ。

「あなたのように学問を積み、信仰を深めた人になら仏様は見えるだろう。けれど、私のように学もなく、しかも無信心な人間に仏様の姿など見えるわけではない。だから、今見

えているのは、仏様であるわけがない」

男がこう叫んだ途端、白象と仏の姿はさつとかき消え、後には漆黒の闇と、獣のようないやな臭いだけが残った。

学を積むということはいったい何か。この説話は私たちにそう問いかけている。学を積みめば、世の中がよく見える。私たちはそのように思いがちだ。本当にそうだろうか。

中世の文学者ラブレもまた、学ぶことの意味を風刺文学の中に塗り込めている。『ガルガンチュワ物語』である。才気煥発であったガルガンチュワが、教師に古典文献を丸暗記させられているうちに、愚鈍になっていく様子が描かれている。結局、ガルガンチュワは、詰め込まれた古典文献を体外に排出するために下剤を飲まされる羽目になる。

2. 粗末な「学力低下論」

学校週五日制、新学習指導要領（現行）の実施が近づくとつれ、学力低下を危惧する声の巷に満ち溢れた。学校週五日制によって学校の授業時数は減少する。それに伴って教育内容は「3割縮減」される。

どのような内容が縮減されるか、その議論のないままに、「授業時数の減少」、「教育内容の3割縮減」だけが一人歩きをし、世は挙げて「学力低下」の大合唱という有様であった。

どのような内容が縮減されるかの具体的指摘が全くなかったというわけではない。円周率「3.14」を「3」にして計算するというあたりは、大分、興味本位で波紋を呼んだ。小学校の算数から「座標」が消えることを、大問題だと指摘した人もいた。

レベルの低い議論で、反論するものも馬鹿馬鹿しい。けれど、一応は、触れておこう。円周率は「3.141592.....」と、小数点以下、無限に数字が続いていく。聞くとこよれば、コンピュータが延々と計算を続けているというのではないか。だとすれば、「3.14」がよくて、「3」ではだめなどという議論ははなはだナンセンスではないか。

「座標」は、私たちが小学校の時にもなかった。しかし、グラフはあった。「座標」などと言わなくても、別段困りはしない。

こういうお粗末な学力低下論は、私には揚げ足取りにしか見えない。

昨年の学力調査の結果を報じる新聞の見出しに「福沢諭吉」を知らない子が大勢いるというのがあった。福沢諭吉を知らないことがそんなに問題か？ そう言えば、私は五千円札の新渡戸稲造について、ほとんど何も知らない。しかし、それで困ったことはないし、そのことを別に恥じる気もない。

これらはみな、学力を知識の量に求めようとする粗末な論である。「あれを知らない」「これを知らない」と触れ回る輩は、先の仏教説話や『ガルガンチュワ物語』をどのように受け止めるのだろうか。

3. 学力低下論の類型と問題

これら粗末な学力低下論は論外ではある。しかし、その他の学力低下論を含めて、学力低下論には共通の問題がある。

その前に、学力低下論には、どのようなものがあるのか、それを調べておこう。

おおまかに3つの類型がある。

第1は、理数科学力低下論である。学校週五日制、新学習指導要領の施行前に、理科・数学の研究者や教育関係者から、一斉に出てきた論である。様々な学力低下論が生まれるきっかけを作った論である。

第2は、第1の類型に煽られ、漠然とした不安を述べるものである。この類型は主として受験生を持つ親や、受験指導に当たる教師から発せられることが多い。よくは分からないのだが、とにかく学力が低下するらしいというような実に漠然とした不安論である。

第3は、少し根拠がある。「読み・書き・算」という基礎学力中の基礎学力でも言うべき力の低下を危惧する声だ。実のところ、読み・書き能力は、学校週五日制、新学習指導要領とは無縁に、すでに進行していたことで

ある。授業時数の縮減は、このことにより深刻な結果をもたらすのではないかとの危惧である。なるほど根拠のある不安である。

ただし、読み書き能力の低下は、教育内容の縮減による問題というよりは、学校の指導の仕方の問題であったと考えた方が良い。

「支援流行りで指導なし」は、学校の先生たちとの会話における私の口癖である。そう言えば、国語教育の大村はまさんも「教えない教師」を問題にしている。

「机間巡視」という語がある。「巡視」は語感が古いので、「机間指導」という語が使われるようになった。ところが、今は「机間支援」という。「きかんしえん」という語を聞けば、まず多くの人には『気管支炎』を思い浮かべる。もはや病気だ。

さて、これら3つの学力低下論に共通する問題がある。すなわち、「学力とは何か」、「全ての子どもが共通に身につけるべき学力」とは何か、という最も肝腎な議論がなされていないことである。

4. 学力とは何か

学力は、国語辞典的に言えば、「学んで得た力」だろう。しかし、学力を論じる場合、より限定的に「学校での学習」を基底に置いて定義することが必要であろう。

国語辞典の中で、最もポピュラーな存在は『広辞苑』であるらしい。『広辞苑』によれば、などという字句をよく見かける。しかし、私は『大辞林』を基本に置くことが多い。

因みに両者の説明を見比べてみよう。

「学校などにおける系統的な教育を通じて獲得した能力。教科内容を正しく理解し、それを知識として身につけ、その知識を応用して新しいものを創造する力。がくりき。」

(『大辞林』)

「(1)学問の力量。がくりき。(2)[教]学習によって得られた能力。学業成績として表わされる能力。」(『広辞苑』)

ここはやはり『大辞林』だろう。

国語辞典ではなく、研究レベルではどうだろう。佐伯は、学力を次のように定義する。

「学力とは、子どもの知的性向のうち、その獲得・形成が教師の意図的・計画的・組織的な教授活動に帰せられるべきことが(何らかの理論的・実践的根拠から)主張できる部分をさす(佐伯胖『学力と思考』第一法規、1982年、p.13)

学力を論じるとき、なぜ、このような定義が必要なのか。それは、学校教育の責務を明らかにするためである。

5. 今、求められる学力とは何か

粗末な学力低下論の項で述べたように、学力 = 「知識量」と捉える風潮は根強い。知識量は、テレビなどのクイズ番組の解答には有用であろう。しかし、本当に重要なのは、知識量ではなく、知識を実際の問題解決に生かす力、すなわち、知恵である。学力の本義は知識ではなく、知恵にある。知恵は、もと智慧と書いた。「慧」の字は、「賢い」の意である。すなわち、知恵とは、知って賢くなることにほかならない。

冒頭の仏教説話はまさにこれである。いくら知識を蓄えても、それで現実を洞察したり、問題解決ができないようであれば、それは、知識であって、知恵でない。

こう考えれば、今必要な学力とは、知恵を育てることであり、知恵に必要な知識の付与とすることになる。

ではどのような知識を付与する必要があるのか。もとより人は、みな同じ境遇で生きていくわけではない。生きる境遇によって、必要な知識は異なる。しかし、普通教育において必要な共通の学力は想定可能である。

それは、次の6つである。

読み、書き、算(四則演算)

科学の方法(科学的思考の手順)

「問う」力(常に合理的な根拠を求めること)

新しいメディアや情報を使いこなす力

(メディア教育、情報教育)

子供が日常体験する自然や社会に関する概念の知識

生活のために必要な技能

以下、順を追って見ていこう。

①: 読み、書き、算(四則演算)

英語にも3R(reading, writing, arithmetic)

という言葉があり、まさに、洋の東西を問わず基礎学力中の基礎学力である。

②: 科学の方法(科学的思考の手順)

科学の方法は、物事を合理的に考える主要な手だてである。J. デューイが課題解決学習の基盤に置いた「内省的思考」(reflective thinking) というのは、その典型である。

③: 「問う」力(常に合理的な根拠を求めること)

「問う」および「疑う」ことは、誰にでもできそうで実はそうではない。たとえ教科書に書かれていることであっても、その根拠を問い、データの妥当性を問うことは真理の追求のために不可欠のことである。

情報化社会と呼ばれる今日の社会においては、マスメディアやインターネットで流される情報の正当性を問うことは、常に必要欠くべからざることである。

このことから教科書はその内容を教えるためのものではないことが判明する。教科書の内容は、真理を追究するための、あるいは、考えるための素材に過ぎない。

④: 新しいメディアや情報を使いこなす力(メディア教育、情報教育)

⑤: で述べたマスメディアやインターネットで流される情報の正当性を問うとともに、メディアを使いこなして情報を効率的に処理する力の涵養である。メディア教育はユネスコが関与するIFTC(International Film and Television Committee; 国際映画テレビジョン委員会)が、1970年代に提唱した概念である。日本では近年、メディア・リテラシーの教育として徐々に拡大しつつあるように見受けら

れる。

⑥: 子供が日常体験する自然や社会に関する概念の知識

余分な説明は不要だろう。もとより、「体験」の領域は、年齢とともに広がる。中学校から高等学校では、政治や経済の仕組み、国際関係などは、不可欠の知識ということになるだろう。

⑦: 生活のために必要な技能

大学院まで出たのに、消火器が使えず、家を全焼させてしまったなどという話は、ごめんこうむりたい。しかし、かつて、家庭科は男女共修ではなかった。私は包丁を使う機会を持たないまま成人し、このままいくと生涯全うに料理のできない人生を送ることになるだろう。新渡戸稲造については、恥じる気がないと言ったけれど、こちらは恥じる必要がありそうだ。

以上、6つの内容については、さらに、そこに含まれる内容を詳細に検討することが必要である。たとえば、語彙はどこまで教えるのか。算については、四則演算を中心に考えればよいとは言っても、実際には、図形や代数は、現代生活において知恵の基礎になる。そういう内容を欠かすわけにはいかない。

こうしたことを1つ1つ考え、しかし、その内容は必要最小限に押さえていくことが必要となろう。

最後に、特に述べたいことがある。漫画以外の本を読むこと、可能な限り文章を書くこと、つまりは、読み書き能力の向上に不可欠の訓練である。基礎学力について「一に国語、二に国語、三、四……となくて、十に算数」と喝破された人がいる。けだし名言であろう。

言葉なくして思考なし。できれば「国語」は「日本語」と教科名を変えること、教科書や副読本はなるべく漢字を多く取り入れ(習っていない漢字にはルビを付す)ること、こうしたことも望まれることである。